

豊島与志雄「台湾の姿態」をめぐる

一、はじめに

豊島与志雄は第二次世界大戦中、何度か中国と台湾に旅行した（詳細は左表の通り）。その台湾旅行は、二回の中国旅行の後、昭和十七年三月から四月にかけて、銃後文芸講演会に招かれ、村松梢風、浜本浩、窪川（佐多）稲子らと同行したものであった。

	時期	訪問地	同行者	注記
第一回中国旅行	昭和十五年三月上旬～四月上旬	上海、蘇州、鎮江、揚州、南京、杭州（江南地域）	谷川徹三、加藤武雄	汪精衛政権の成立を見守った。
第二回中国旅行	昭和十五年九月	青島、濟南、北京（華北地域）	詳細不明	
台湾旅行	昭和十七年三月～四月	台湾本島を一周	窪川（佐多）稲子、浜本浩、村松梢風	文芸講演会で講演。

呉 若 彤

第三回中国旅行	昭和十八年十月	上海、南京	内山嘉吉（内山書店主内山完造の弟）	
第四回中国旅行	昭和十九年十一月	南京	途中まで阿部知二と同道	第三回大東亜文学者大会に出席。

この一ヶ月間の台湾体験は、豊島が日本に帰国して間もなく、紀行文「台湾の姿態」として結実し、同年六月雑誌『文芸』に発表。ほかの中国旅行記とともに、同年十二月発行の単行本『文学母胎』（河出書房）の第三部紀行文に収録された。

「台湾の姿態」について、関口安義『評伝豊島与志雄』（昭和六十二年十一月未来社）は、「適確な観察眼と現地人に寄せる暖かな眼がある」と評しているが、具体的な分析はなされていない。一方、同行者である窪川稲子も、その体験を下敷きにして小説「台湾の旅」を執筆し、翌昭和十八年九月（第八巻第九号）から昭和十九年一月（第九巻第一号）、台湾の文芸誌『台湾公論』に四回連載した。本作は、皇民化運

動の最中にあった台湾の様子を確かに捉えたと評価されている（河原功「ほか」編『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』平成十年七月緑蔭書房）。

ここでいう皇民化運動とは、台湾の人々を日本人化させるため、昭和十一年からスタートした同化運動のことである。「内台一如」を指針とし、改姓名をはじめ、日本語の普及を目的とする国語運動や、日本の宗教・風俗の導入などが実施される一方、台湾の伝統的な娯楽、すなわち「歌仔戲」（中国芝居）、「布袋戲」（人形芝居）、「皮戲」（影絵芝居）などが次々と禁止された。また、昭和十五年十月に設立された大政翼賛会の推進母体として、昭和十六年四月十九日には台湾皇民奉公会が発足した。その主な事業は、台湾在住者を日本の皇民にまで錬成して国に挺身・奉公させる「皇民錬成運動」である。更に、昭和十七年四月には台湾在住者に対して志願兵制度が開始された（以上、山口守編・藤井省三「ほか」著『講座台湾文学』平成十五年三月国書刊行会、下村作次郎「ほか」編『よみがえる台湾文学』平成七年十月東方書店、藤井省三『台湾文学この百年』平成十年五月東方書店、等）。

評価の高い「台湾の旅」とは対照的に、豊島の「台湾の姿態」はこれまであまり注目されてこなかった。しかし、記録文学的性質を帯びたこの紀行文には、豊島の台湾認識がはっきりと記されており、「台湾の旅」と同時代的な作品としても、改めて検討・考察に値しよう。本論では、「台湾の旅」や、当時の台湾で発行されていた新聞・文芸評論など同時代資料を適宜参照しつつ、昭和十七年春の台湾訪問の実態を明らかにするとともに、豊島与志雄の台湾認識について考察した

い。

二、昭和十七年春の台湾訪問について

まず、当時台湾で発行されていた「台湾日日新報」「興南新聞」（いずれも台湾大学蔵本による）の記事によって、前述した四人の行動を跡づけよう。彼等は、大東亜戦争文芸講演会（台湾文化普及会・興亜経済社共催、台湾総督府情報課後援）に招かれ、昭和十七年三月に台湾を訪れた。一行の旅程は以下の通りである（「興南新聞」は《興》、「台湾日日新報」は《台日》と略記した。なお、新聞の見出しは◇、記事の引用は「」、難読文字は□で示す。呉による注記は○でくくった。以下は同じ）

* 昭和十七・三・二十五（水曜日）《興》

〈四小説家が来北 全島各地で講演会〉

「村松梢風、窪川稲子、豊島与志雄、浜本浩の日本文壇の四作家が銃後の講演行脚に来北し台北鉄道ホテルに旅装を解いたが、浜本氏は多少風邪気味といふのでホテルから一步も外に出ず、村松氏もまた旅に疲れてゐる有様、四氏のうち村松氏は来台したことがあり外の三氏は始めてだ、豊島氏が風邪気味の浜本氏の病床を慰めようと一束の花を攜んで帰つたのは夜の十時頃だそこでホテルの一階広間に豊島氏と窪川女史が南国の夜の情緒を味はひつゝ、語つたことには 成程台湾は暑いね、しかし風景が綺麗だ といふことであつた」

*昭和十七・三・二十五（水曜日）《台日》

〈銃後文芸講演会 二十六日から全島各地を巡回〉

「（書き出し判読困難）現下文壇の第一線に独自の地歩を占める□メンバー□□として銃後文芸大講演会が台湾文化普及会並に興亜経済社主催、府情報課後援を□□□三月二十六日から四月上旬に□□台北を初め島内各地で□□□豊島与志雄、村松梢風、浜本浩、窪川稲子の諸氏である。□台北市は三十、三十一の両日午後七時から公会堂で開催されることになつてゐる。

〈長谷川総督を訪問〉

二十四日来台の文芸家村松梢風、豊島与志雄、浜本浩、窪川稲子諸氏は同日午後三時官邸に長谷川総督を（以下、本文判読困難。）」

*昭和十七・三・二十六（木曜日）《興》（長文のため摘録）

〈太平天国の乱に日本刀が大活躍 村松氏「新水滸伝」を語る〉

「村松梢風、窪川稲子、豊島与志雄、浜本浩の四作家は二十四日来北、二十六日新竹を皮切に全島各都市で銃後文芸講演会を為すこととなつたが」（以下、村松梢風の「新水滸伝」についての話が続く）

*昭和十七・三・二十六（木曜日）《興》夕刊

「（新竹電話）新竹州では州民に時局認識を一層徹底させるため目下来台中の文芸家一行四名を招聘し二十六日午後三時より市営有楽館に於いて大東亜戦争文芸講演会を開催すると」

*昭和十七・三・二十七（金曜日）《興》

〈大東亜戦争文芸講演会〉

「（台南電話）大東亜戦争の完遂を期し国民覚悟の喚起と一層時局の認識を昂めるため台南市では二十八日午後八時より南門国民学校講堂に於いて大東亜戦争文芸講演会を開催する弁士は来台中の文芸家一行豊島与志雄、村松梢風、浜本浩、窪川稲子の四氏である」

*昭和十七・四・一（水曜日）《台日》

〈文芸講演会〉

「台湾文化普及会並に興亜経済社共同主催総督府情報課後援の「大東亜戦争文芸講演会」は文壇の□□浜本浩、豊島与志雄、窪川稲子、村松梢風の諸氏に依つて三十日午後七時から台北市公会堂で開催されたが会場は立錫の餘地なき超満員で聴衆に多大の感銘を与へ同十時閉会したが同講演会は引続き三十一日も市公会堂で演題を変更して催されるまた一行は四月二日に花蓮港を□□出しに全島講演行脚を行^マ々^マふ」

四人の演題は以下の通り（講演会の様子を写した写真入り。判読困難な字は、『台湾芸術』通巻第二十五卷（昭和十七・五・二）掲載の目録によつた）

万里の長城を越えて	村松梢風
醜の御楯	浜本 浩
婦人の立場より	窪川稲子
「島」の観念	豊島与志雄

*昭和十七・四・二（木曜日）《台日》

〈人事コラム〉

「村松梢風氏（作家） 豊島与志雄氏（同上） 窪川稲子氏（同上）
一日花蓮港へ」

*昭和十七・四・三（金曜日）《台日》

〈人事コラム〉

「浜本 浩氏（作家） 二日花蓮港へ」

*昭和十七・四・五（日曜日）《台日》夕刊

〈花蓮港で文芸講演会〉

「（花蓮港電話） 皇奉花蓮港庁支部主催の大東亜戦争文芸講演会は二
日午後七時半から女学校講堂で開催、豊島与志雄、村松梢風、浜本浩、
窪川稲子の四氏雄弁を揮ひ満堂の聴衆に多大の感銘を与へて十時半終
了した」

*昭和十七・四・五（日曜日）《台日》

「（高雄電話） 高雄市では六日午後七時半より市会議室で大東亜戦争
文芸講演会を開催する、講演者は村松梢風、豊島与志雄、浜本浩、
窪川稲子の四氏で」（以下、判読困難のため省略）

*昭和十七・四・九（木曜日）《興》

〈文芸講演会 けふ彰化で〉

「大東亜戦争の完遂を期し銃後島民の時局認識を一層徹底せしむ為
め彰化市役所府情報課後援の下に本四月九日午後七時より彰化高等女
学校講堂に於いて大東亜戦争文芸講演会を開催することになつてゐる
が講演者は次の通りである。

村松梢風、豊島与志雄、浜本浩、窪川稲子」

*昭和十七・四・十一（土曜日）《台日》

「豊島与志雄氏（作家） 村松梢風氏（同） 窪川稲子（同） 浜本
浩（同） 十日南部より来北（鉄道ホテル）」

*昭和十七・四・十六（木曜日）《興》

〈港都文芸講演会〉

「（基隆電話） 基隆市では皇民奉公会市支会と共同主催の下に目下
台中の文芸家村松外一行を招聘し十七日午後七時より市公会堂で大東
亜戦争文芸講演会を開催することになつたが演題並びに講師左の如し
万里の長城を越えて 村松梢風

日本人的死生観 浜本 浩

婦人と読書 窪川稲子

鍛錬の指標 豊島与志雄」

以上をまとめたものが、次の表である。

①三・二十四（火）	台湾（基隆港）着。
②三・二十五（水）	台北で総督長谷川清を訪問。浜本浩発熱。
③三・二十六（木）	新竹市宮有楽館で講演。
④三・二十八（土）	台南市南門国民学校講堂で講演。
⑤三・三十（月）	台北市公会堂で講演。 《演題》 「万里の長城を越えて」 村松梢風 「醜の御楯」 浜本 浩 「婦人の立場より」 窪川稲子 「島」の観念」 豊島与志雄
⑥四・一（水）	浜本浩以外の三人が花蓮港に向かう。
⑦四・二（木）	浜本浩が花蓮港に向かう。四人が花蓮女学校講堂で講演。
⑧四・六（月）	高雄市会議室で講演。
⑨四・九（木）	彰化高等女学校で講演。
⑩四・十（金）	四人が台北へ発つ。
⑪四・十七（金）	基隆皇民奉公会市支会で講演。 《演題》 「万里の長城を越えて」 村松梢風 「日本人的死生観」 浜本 浩 「婦人と読書」 窪川稲子 「鍛錬の指標」 豊島与志雄

以上のように、一行は少なくとも三月二十四日から四月十七日まで台湾に滞在し、台北―新竹―台南―台北―花蓮―高雄―彰化―台北―基隆の順番で台湾全島を周回した。なお、本論末尾に掲げた図2の「台湾視察案内図」（鉄道部編纂『台湾鉄道旅行案内』昭和十七年二月東亜旅行社、所収）も参照されたい。豊島が、「台湾の姿態」で、台北・

淡水・板橋・鹿港・花蓮・基隆・宜蘭・知本・台東・新竹・霧峰・台中・台南・蘇澳などの地名に言及するのは、実際に旅した際の見聞に基づいているのである。

この講演旅行の様子は、窪川の小説「台湾の旅」にやや詳しく描かれている。台湾訪問は、ヒロイン宮川の一人旅として設定されているが、船で基隆に着いてから、台北―宜蘭―花蓮港―台東―屏東―枋寮―台湾最南端ランピ―高雄―台南―虎尾―台中（講演会に参加）と、台湾を東回りに巡っている。また、途中で列車に乘ったり、海路を利用したりすることもあった。前述した実際の旅程と照らし合せれば、主人公宮川の足跡に虚構が加わっていることがわかる。なお、宮川が台湾に到着してまもなく発熱したとの設定は、前掲『評伝豊島与志雄』では作者窪川の実体験だと考えられていた。ヒロイン宮川の姿に、窪川が台湾を訪れた当時の心境が色濃く反映されていると推測されたからである。しかし、本作が『佐多稲子全集』第三卷（昭和五十三年二月講談社）に収録された際、佐多は後記において、主人公宮川の造型は浜本浩をモデルにした、と述べている。浜本の発熱は、前述の三月二十五日「興南新聞」に見える通りであることから、佐多の発言は裏付けられる。

新聞記事からは確認できないが、上記以外に、台中でも講演会の開催予定があったようである。「台湾の旅」には、「台中は静かな町である。（中略）その夜、此处で講演会を開くことになってゐた。公園の中にある会場で」云々と、台中での講演会のこと綴られていた。また、黄惠楨「第三章 迂回前進…文壇奉公與楊逵的抵抗（第三章 迂

回しつつ前進―文壇奉公と楊達の抵抗―」（『左翼批判精神的鍛接―四〇年代楊達文學與思想的歴史研究（左翼的な批判精神―一九四〇年代における楊達の文学と思想に関する史的研究）』（書名の訳は呉による）一二一―二三〇頁、平成二十一年七月台北秀威資訊科技股份有限公司出版）によれば、台中で台湾新聞社文芸部長を勤め、文芸誌『台湾文学』の同人でもあった田中保男は、楊達をはじめとする『台湾文学』の同人らと中部文芸懇話会を組織し、昭和十七年春に、来台中の作家四人を招いて台中で文芸講演会を開催したという。実際、この講演会は「台湾の旅」でも終盤あたりに登場するが、前述のようにヒロインの足跡が実際と一致しないため、開催日は不明である。講演会の開催地は、「台湾の旅」に「公園の中」とあるのによれば、台中市の北東部、台中神社が鎮座する公園であろうか（付記の図1「台中市街略図」参照。鉄道部編纂『台湾鉄道旅行案内』昭和十五年二月東亜旅行社、所収）。

台湾での文芸講演会の目的は、前掲三月二十七日「興南新聞」にいうように、「大東亜戦の完遂を期し国民覚悟の喚起と一層時局の認識を昂めるため」であり、また四月九日同紙にいう「大東亜戦争の完遂を期し銃後島民の時局認識を一層徹底せしむため」であった。「醜の御楯」や「鍛錬の指標」などの演題からも、戦時下という非常時にあって、「日本国民」としてのあるべき姿を示唆する意味合いが窺えよう。講演内容の詳細は不明だが、管見の範囲でこれに触れたものに、三月三十日台北開催の講演会に関する、『台湾芸術』第三巻第五号（前出の通巻第二十五巻（昭和十七・五・二））と同。この号の現存唯一とさ

れるスタンフォード大学蔵本による）の記事がある。資料的にも貴重なので、以下に、記事と講演要旨を引用する。

〈内地四作家の大東亜戦争文芸講演会―島民に多大の感銘を与ふ〉
「既報興亜経済社の招聘に依り去月^マ（二十四日）来台した村松梢風、豊島与志雄、窪川稲子、浜本浩四作家の大東亜戦争文芸講演会は二十六日の新竹を皮切りに全島主なる都市を巡回講演したが台北市に於ける講演会は三十日午後七時から市会堂で開催され先づ^マ村松氏の挨拶があつて後、浜本、豊島、窪川、村松の順にて夫々熱弁を揮つて満堂の聴衆に多大の感銘を与へて同十時散会した。四作家の講演要旨は大体次の通りである。（順次不同）」

〈万里の長城を越えて〉 村松梢風氏

「万里の長城は北から攻める満州族を防ぐために築城されたものであるが、私は南京政府が今にして抗日政策を改めなかつたら、皇軍は怒濤の勢ひで長城を突破することは明かであり、余勢を駆つて中原を平定する結果となるといふことを北京の黄郛、何応欽に忠告したことがあつた。支那事変はこの北から攻めるといふ神意によつて今日の戦果を招来したものである。大東亜戦争が勃発してから国民の関心は一斉に南方^マへ向けたので、支那に対しては些か忘れてあるやうな形になつたが、大東亜共栄圏を建設するには対支問題を度外視することは出来ない。台湾は対支問題を研究するには人文的にも歴史的にも又地理的好条件に恵まれてゐるから、島民諸君の折角の努力を希望する。」

ここで豊島が、台湾と日本に島に因んだ神話があるというのは、日本神話と南方神話を比較の手法で研究した歴史学者松本信弘の指摘に因んだものかもしれない。平藤喜久子「昭和前期の日本神話研究―植民地帝国の神話学」(http://kga.oceaw.ac.at/Events/shinto_nationalism07/papers/hirafuji.pdf Shinto Studies and Nationalism Symposium、平成十九年九月十二日～十四日、於 Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens「オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所」)によれば、松本の神話研究は台湾と日本の連帯性を強調するのに都合のよい根拠を与えたため、大東亜戦争の最中、日本の植民地支配や南方への進出などといった大東亜共栄圏構想に結び付けられた、とされる。当時、豊島は大政翼賛会文化部の相談役を務めており(櫻本富雄『文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』平成七年六月青木書店)、国策的な枠組の中で発言したものと推測される。

時局的な発言だけではなく、地元の知識人との交流も果たされた。講演旅行の途中、台北鉄道ホテルで『台湾芸術』のインタビューを受けた豊島と浜本は、「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」(『台湾芸術』昭和十七年五月第三卷第五号)^②で講演会について、「聴衆は相当多かった。然もインテリが大部分だ」とその印象を述べている。また、「台湾の姿態」で豊島が「台湾に於ける文学者達、『台湾文学』や『文芸台湾』などに拠つてゐる人々」というように、『台湾文学』同人だけでなく、『文芸台湾』のメンバーたちとも交流があった。

一方、台湾の知識人たちも四人の作家に期待を抱いていた。台湾旅

行の直後、昭和十七年五月『文芸台湾』(第四卷第二号)掲載の浜田隼雄こと速河柁夫(同誌同人)「文化時評 作家の来台」は次のようにいう。

昨年末に銃後文芸講演会の計画があつたのを、大東亜戦の勃発によつて中止になつたが、四月に東京の某実業雑誌社(呉註―興亜経済社)の肝入りで豊島村松浜本窪川の四氏が来台、全島を講演して廻つた。雑誌社の計画でも、奉公会や情報課が何やかと援助して、島内の文化人との交歓も世話して呉れたことは、本島文化向上のために甚だ慶賀に堪へないと思ふものである。四五年前までは、当局でもかうした仕事に見向きもせず、作家の方でも台湾くんだりまで、進んで来ようとはしなかつたことを考へると、台湾の文化的地位の向上と云ふことがしみじみ考へられて愉快である。(中略)南方へ南方へと渡つて行く足場として台湾を通過するやうなことになるのは折角正しく認識して貰はうとしてゐるが、途中の瞥見に終つてしまつて、淋しいことになるのではないかと云ふことである。南方への途中でも悪くはないから、寸時を割いてでも台湾を閑却しないやうに、当局や在台文化人は、要領のよい台湾案内人にならなければならないのであらう。それから従来の作家の来台は講演するのが主目的で、台湾の現実認識は講演の合間に副次的になされてゐるが、これも一考を要する。講演は二の次にして、作家の眼を以て、現実の台湾の正しい認識をして、文化的な見方に於いての台湾統治の参考になるやうな意見を徴するやり方も考へて欲しいものである。(中略)未知の台湾の

真の姿を知らうとの情熱を持ち、少くとも一ヶ月位はひとりで台湾を歩き廻るやうな誠実な作家でなければならぬが（下略）

すなわち、講演にのみ重きを置くのではなく、台湾の様子を正しく認識した上で、台湾の現実に即して文化的な意見を提案することが、作家たちに期待されているのである。こうした現地の期待を念頭に入れた上で、次節では豊島の「台湾の姿態」について、細かく検証していきたい。

三、豊島与志雄の「台湾の姿態」

「台湾の姿態」の構成は大雑把でありながら、主として、台湾風土の特殊性、台湾の文化現状、及び文化台湾の育成に対する提案と、三つに分かれていると見られる。以下、豊島が着眼した箇所を、同行者の窪川及び浜本の発言と、旅行者の目に留まりやすい旅行案内書——主に鉄道部編纂『台湾鉄道旅行案内』（以下、注記がないものは昭和十七年版を指す）の記事を参照しつつ捉えていく。

三― 台湾風土の特殊性

【自然】

冒頭に「台湾の印象は、まづ山と川から来る」とあるように、豊島は最初の印象として台湾の自然を挙げる。特に、花蓮港をはじめとする台湾東部に光を当て、かなりの紙幅を費やして東台湾について述べ

ている。「比類ない断崖と深潭と高峯とを以て成るタコロ峡（「タコロ峡」の誤記か）や「蘇澳から花蓮港に至る間の海岸絶壁を縫ふバス道」などの名所は言うまでもなく、「台湾東部の山と河はすべて、一般に強い印象を与へる」と、その印象の強さを感じ取っている。台湾東部の山々は、「麓や中腹とともに、頂までがぢかに人に迫ってくる」と迫力を感じ取っているのだが、その印象の強さは河川も遜色がない。「或はごろた石の、或は砂利や砂の、広い河床であつて、雑草が茂り、自由耕作がなされてる部分もある。（中略）大雨に及ぶと、山水が一時に注ぎこんできて、全面的に河となる。（中略）また暫くにして、元の河床に復帰する」という風に、河川の細かい変化にまで観察の目を配り、それによつて「溪の水量の激変は大なる熱情の変動を思はせる」と受けとめている。豊島は、「東部のそれらの山と溪とに、私は台湾の熱情を見る。地上の自然界の熱情である」と、山々の迫力と川の激しい変化とを一種の熱情として捉え、「天然樟樹の森も、椰子の林も、蘇鉄ばかりの山も、見渡す限りの甘蔗畑」などの南国風景でさえも、山や溪の熱情に比べれば「甚だ微弱なものと云はねばならない」と評する。豊島によれば、台湾の熱情はほとんど東部の自然の中に凝縮されているのである。こうした豊島の観察は、左記の『台湾鉄道旅行案内』の東海岸の記事とほぼ対応していると見られる。

〈島情 一班・地勢〉

「蘇澳花蓮港間道路の様に絶壁が直ちに海に迫つた処が多く」（十一頁）

「河流は東部に短く西部に長く、淡水河、濁水溪、下淡水溪等を代表的な大河として挙げる事が出来るが、舟航の便があるのは淡水河だけで、其他は上流が峡谷をなし、平地に出ても砂礫を放流して荒地を造るのを通常としてゐる」(十一頁)

〈次高タロコ国立公園〉

「世界屈指の豪壮幽邃な大峡谷風景、並びに東海岸の大断崖道路の臨海風景を有し、比類のない原始的大風景地を形造つて居り、将来最も有望な公園である」(三十頁)

以上のように、「台湾の姿態」で描かれた台湾東部は、絶壁などの景観上の特徴が的確に把握されているとわかる。

また、豊島は台湾の気候に関しても適確に把握している。前掲『台湾鉄道旅行案内』では、「台湾の南と北とは大なる相違がある。即ち北部の台北方面は十月から三月迄の冬季六箇月は季節風の影響を蒙り、一、二、三月頃は殆ど連日雨つゞきで内地の入梅頃と同じであるが、南に行くに従つて湿度を減じ、台中以南に到ると却つて乾燥期になつてゐる」(十一頁)と、台湾の気候が紹介されるが、豊島も「台湾の気候は大体、北部と南部とでは、その雨期と乾燥期との時期に於て対蹠的である」と同様に捉えている。なお、「竹風蘭雨」(新竹では風、宜蘭では雨)という、天候上の特徴を表す台湾の諺にまで触れる豊島からは、台湾の自然を念入りに把握しようとする姿勢が窺われる。

【生活】

台湾の豊かな自然を、「熱情」という言葉で把握した豊島は、次に台湾ならではの生活ぶりに目を向ける。

まず、台湾名物の一つに数えられる果物を取り上げているが、意外にもそれは、日本人の馴染んでいるバナナではなく、パイナップルである。「果物の秀逸はパイナップルであらうか。その味はバナナにまさることは勿論である」と高く評価する。「パイナップルだけは一年中常に結実する」ため、いつでもその美味を賞味でき、台湾を代表する味と考えたのであろうか。なお、窪川の「台湾の旅」においてもパイナップルが登場する。「バナナとちがつて内地の市場を振はすことの出来ぬこの果物は土地に住む日本人の、我が秘蔵の品のやうに旅人に先づすゝめる最初の贈物だ」と、自慢すべき逸品としている。パイナップルは台湾を訪れた人しか知らぬ味であり、日本にはまだその良さが広く知られていないために、特に言及したのであろう。

豊島は、本島人の生活力を窺わせるような食物市場も取り上げている。「台北にはうまい食物市場がある。江山樓前市場には、毎夜、百以上の屋台店が並んで、鶏肉や魚肉や豚の耳などが豊富にある」とあるが、ここに現れた「江山樓前」の市場とは、江山樓前の市場のことであろう。「台湾の姿態」とほぼ同時期に発表された、同じ台湾訪問を素材にした豊島の少年文学「光を育てる人々」(昭和十七年六月―十二月『少国民文化』七回連載)においても、「江山樓前」の市場が登場する。その他、「永楽市場の一隅にも、毎昼、豊富な屋台店が出る」とあり、食物市場で「飲食してゐる本島人の生活力が思はれる」とあるように、豊島は活

気に溢れた食物市場に本島人の生活力の源泉を見て取っているのである。この食物市場に関しては、前掲『台湾鉄道旅行案内』にも「市場の中や街頭に見る飲食物の中には、真に台湾在来の味を持つ珍しいものが味覚を楽しませて呉れる」と紹介され、台湾一周のモデルコースにもその名が挙がっている（付記の図3「台湾一周旅行日程」第二日の記事を参照）。屋台の食べ物については、窪川や浜本も楽しさを実感したようで、「台湾の旅」で主人公が台北に到着した晩、「夜の街へ出ると、屋台の食物の匂ひが流れてゐた」とある。前掲「興南新聞」三月二十五日記事によれば、台北に到着した夜、豊島と窪川の二人が街に出かけたことが確認できる。この時に食物市場にも立ち寄ったものか。なお、前掲「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」でも、浜本の述懐に「台北へ来ても大稲埕方面^③の夜の盛場（露店）を見大いに台湾の情緒を味ひ得た訳だ」とある。実際は、「本島人の上流階級はなかなかこんな場所に立寄らない。内地人も全体的にさうである」（『台湾の姿態』とあるように、食物市場はあくまで本島人の庶民階級の生活圏であり、その活況も台湾民衆の一部に留まっていた。

第三に豊島は、そうした庶民的な酒として、長く台湾に滞在している内地人でも知らないような、台湾老紅酒について言及した上で、「普通の日本酒よりも美味」と高く評価している。浜本も、「台湾の清酒何ておいしくないね金鶏が台湾を表徴している様な気がする。やはり台湾に来て金鶏を飲んだ方が台湾へ来た感じがする」（『豊島与志雄・浜本浩 縦横談』と、金鶏を堪能した。前掲『台湾鉄道旅行案内』によれば、金鶏が老紅酒を指すことがわかる。そして、この台湾の地

酒に関しては、同案内書に「台湾独特のもので且つ世界に冠たるものとして挙ぐべきものに紅酒があります」との言及があり、更に、「品質の優良なことは支那の紹興酒に匹敵するもので、台湾に於いても非常に重要視され、本島の習慣として冠婚等の祝宴には必ず用ふるものとなつて居」と、民衆の生活に深く浸透していることが紹介されている。ところが豊島は、その老紅酒を「知らないといふ内地人新聞記者を、而も十年も台湾にゐる記者を、私は知つてゐる」と指摘する。こうした状況は、個人の嗜好によるものとしては片付けられず、台湾の生活・文化への内地人の無関心・無理解を露呈しているよう。

以上のように豊島は、台湾の豊かな自然を野性的活力をイメージさせる「熱情」という言葉で把握し、自らの実体験に基づいてその特殊な風土や食物・酒を紹介している。しかしその一方で、台湾在住の内地人や、本島人の上流階級でも知らない物も取り上げていた。

その観察、特に自然描写に施された細かい筆致が、前掲『台湾鉄道旅行案内』のような旅行案内書の記述とほぼ合致していることからみて、あるいは、昭和十七年二月に年度版が発行された本書を参照しつつ執筆したのではないか、とも推測される。確かに、『台湾鉄道旅行案内』は台湾総督府交通局鉄道部内の社団法人東亜旅行社台湾支部編纂であり、公的に認められた、適確な情報源なのだが、しかし実際に台湾各地を旅行したからには、これだけではなく、自分が直接目にした事柄もバランスよく取り上げたものと考えられる。

三二 台湾の文化現状

豊島は、本島人の田舎町や高砂族の集落などを例に挙げ、台湾では近代文明的な生活がある程度進展していると認めながらも、文化と自然を対比し、窪川稲子の言葉「台湾の夕方は不思議に淋しさを感じる」に同調して次のように述べている。「一口に云つてしまへば、台湾では、自然が人間に勝つてゐる。人間は自然に負けてゐる。そこに淋しさがあるのだ」（『台湾の姿態』）。台湾の自然に人間や文化が圧倒されている、との指摘である。この点は同行者の浜本も同感している。浜本および豊島の両氏は『台湾芸術』のインタビューに臨んだ際、台湾文化への印象について「自然の手応へがあるが、人間の手応へがない様。（中略）まあ性格と熱情に欠けてゐる事だらう」と、回答する（『豊島与志雄・浜本浩 縦横談』）。

台湾の人々、ひいてはその文化における「性格と熱情」に関して豊島は、「文化の問題から観て、人間が自然に負けてるといふことは、自然は既に明らかに独自の性格を具へてゐるが、人間文化は未だ独自の性格を具へてゐない、とそれだけの意味にしてもよろしい。台湾には台湾としての性格があるべきだ。」「台湾定住の内地人は甚だ少い。随つて日本文化は、台湾に浸潤してるところか、卑俗な面の移植でさへも局限されてゐる。高砂族の文化は、まづ文化以前の程度と云つてよからう。本島人の文化は、悉く支那文化の末流である。」「（台湾の姿態）」と、その文化の未熟さ、独自性の無さを指摘している。

昭和十一年の皇民化運動以降、台湾では「日本化」が進められてきた。にもかかわらず、豊島は日本文化がなお台湾に定着していないと

言い、その原因を「台湾永住の覚悟を持つ者」が「甚だ少い」ため、としている。確かに、昭和十七年の人口数（台湾総督府総務局編『昭和十七年台湾人口動態統計』昭和十八年十月三十一日発行三和印刷）で見ると、台湾常住の内地人人口の三十八万四千八百四十七人に対し、本島人は五百九十八万九千八百八十八人で、桁違いに少ない。

豊島が「本島中の各家庭には、神体を祭る白木の厨子が安置してある。各地には、純粋な様式の神社が建てられてゐる。だが、それらは余りに簡素で高潔」というように、日本文化の基盤となるべき宗教は、台湾という受け皿に融け込んでおらず、遊離しているのである。日本文化の主体である内地人が少ないために、日本文化移植は中途半端なものとなつてしまい、元来日本とは異なる生活習慣を持っていた本島人は、「日本化」させられてもどうしても同化できない、ということであろう。換言すれば、台湾という土地柄を考えずに日本文化を一方的に移植した結果、その文化は未成熟のままに置かれた、ということであろう。

そこで豊島が着目したのは本島人独自の文化であつた。中国文化を脈々と受け継いだ本島人の文化について、板橋の故林本源氏邸・霧峰の林獻堂氏邸という台湾有数の中国式邸宅を引き合いに出した豊島は、しかし「本島人の文化は、悉く支那文化の末流である」と評する。板橋の林邸と霧峰の林邸は前掲『台湾鉄道旅行案内』などの旅行案内書にも紹介される台湾随一の名邸であり、窪川「台湾の旅」においても特筆されている。豊島はその立派さを認めつつも、「支那本土のものに比ぶればやはり侘びしい」と感想を述べる。それは、台湾訪問以

前の二度の中国旅行の見聞に基づいた見解と思われる。日本文化であるが、中国文化であろうが、いずれも台湾の土地に根を下ろしているとは言い難い、という認識であろう。

では、中国文化を体现した上流階級とは対照的な、民衆生活に密着した大衆文化はどうだろうか。日本の神社とは対蹠的に、「天后宮や城隍廟の狭い境域には、卑俗な偶像が立並び、物売り店があり、本島人の貧しい人々が群れてゐる」にもかかわらず、「支那芝居は固より、人形芝居や影絵芝居なども、禁止の状態にある。(中略)映画は少く、民衆の娯楽としては何があるか。未だ何もない」という記述からは、豊島が台湾固有の大衆文化の停滞に気付いていたことが窺われる。豊島のいう「淋しさ」とは、こうした文化の貧弱さを含意しているのではないだろうか。

これを克服すべく、前掲「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」には、人形芝居や台湾独自の演劇などについて、豊島は次のように発言した。

(二) 台湾へ来て台湾独特の演劇や娯楽は一つも見受けられなかった。影芝居や人形芝居は全然な様だ。あんなものは僕は良いと思ふ。(中略)当局で厳に監督して上演させたらよいのぢやないかね、これが台湾の地方的な文化の一つだと思ふ(中略)台湾文化の提唱と云ふ見地よりして影芝居、人形芝居は種々改善をなして大いに台湾独特の文化としてそれを確立すべきである。

(二) 台湾本来の独特の演劇使命を無視して急に内地の演劇を移してきたんでは大衆がついて来たらず演劇や娯楽としての存在価値がなくなる。(中略)台湾の演劇については内地から松井氏⁴⁾を招聘して来ても従来の台湾の長所を生かして而して大いに日本精神を注入すれば立派なものが出来、台湾文化の一つとして健全な歩みが続けられるだらう。余り主観的な立場から島民大衆の慾求してゐるものを除去しては本島の演劇は仏造つて魂を入れない様なものとならう。(番付は呉によるもの。以下は同じ)

影芝居や人形芝居などを台湾文化にとって大切な存在と認めた上で、種々改良すれば立派な地方文化の一つになる、という立場である。また、台湾演劇確立の企画に関しては、日本の演劇を急に移入すべきではなく、台湾の大衆受けを配慮し、土地柄を考えなければならぬ、と指摘する。いずれも、ローカルカラーを生かした地方文化の確立を願う意見である。

豊島は、台湾で行われた「日本化」により台湾固有のものが抑圧され、疎かにされてきたため、固有の文化が進化しそびれたと考え、その改善案を提示したのである。

人形芝居や演劇などへの言及からも窺えるように、豊島は台湾の独自性、ローカルカラーの育成を主張する。それは、単に在来のもを昔のままに復活させよ、というのではなく、「台湾では台湾料理を加味して所謂台湾独特の料理を作るべきである」(「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」)との豊島の主張に見られるように、その特殊性を生かすこ

とによって文化向上を促すことだったと思われる。

これは、地方文化を重視する大政翼賛会の方針に豊島が従ったことを意味している。前掲「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」で豊島が、「内地でも地方文化の振興を盛んに提唱してゐる。地方文化に関しては翼賛会でも大事に取り上げて研究してゐる。ローカル文化の提唱は必要であつて、東京文化のみでは一寸ウマク行かないだらう」と言うように、大政翼賛会の活動に沿ったものであつた。日本の南方進出・大陸進出に伴い、国民文化の振興が植民地も含めた大東亜共栄圏の文化建設にも導入された。日本文化を異文化とする植民地の人間に対して、共鳴と求心を促すべく、ローカル文化・各地在来文化が尊重され始めたのである。植民地における地方文化のあり方に関して、大政翼賛会文化部長岸田国土は、昭和十六年八月二十八日付「台湾日日新報」に「台湾なら台湾、朝鮮なら朝鮮の特殊性」という方向を示したが、それ以来、台湾色の再発見は台湾における文化政策の主調音となりつつあつた⁽⁵⁾。

台湾の特殊性、ローカルカラーの育成を主張した豊島だったが、前掲のように「台湾の姿態」では「高砂族の文化は、まづ文化以前の程度と云つてよからう」とも述べていた。昔ながらの原始的な色彩をなお強く残す高砂族の文化を、文化以前と受け止めたのは、高所からその文化程度を判別するものであり、現在から見ればそこに豊島の限界があつたといえよう。台湾の土俗や旧習などを全て受け入れたわけではないのである。

三―三 文化台湾の育成に対する提案―建築と文学

台湾の特殊性を生かすことで独自の文化を育む、という豊島の提案の具体例は、建築に求められる。

真つ先に例に挙げられたのは、淡水中学校である。「亭子脚を具へた廊下、窓や壁間の均勢、中央のドームなど、西洋と支那との両様式を巧みに取り入れ、而も台湾の土地柄に適合したものとなつてゐる」。この亭子脚とは、台湾の市街住宅建築の一特色であり、通行人が暑熱や雨を避けられるように、道路に面して屋下に歩道を設けたものである（前掲『台湾鉄道旅行案内』参照）。

次は、台湾のパンテオンとも見なされる建功神社である。「煉瓦造りの本屋に円蓋をそばだたせ、左右に翼を張り、瓦屋根を前方につきだし、広い深閑たる土間を礼拝所とした」とあるが、これは台湾の功労者を祭るべく、設計者の井手薫氏が、和・洋・中の要素を折衷して新たな廟形式を考案したものである（『日本地理大系第十一卷 台湾篇』昭和四年五月改造社）。豊島は、井手氏のそうした斬新な創意と発想を高く評価している。

なお、厳密には建築物とは言えないが、豊島は「台南市の駅前から銀座通りへ至る間の鳳木の並木」にも目を惹かれ、「凡そ並木としての秀逸なものである」と讃える。鳳木とは、鳳凰木のことで、マダガスカル島原産のマメ科常緑高木であり、花は緋紅色で上弁には黄色の条線がある。熱帯地方でよく街路樹にされる（『日本国語大辞典』第二版、平成十三年一月小学館）。窪川も、この鳳凰木の並木に好印象を持ち、「台湾の旅」で「鳳凰木の美事な並木」と綴っている。いか

にも南国的な美しい光景であり、台湾の風情を引き立てるインフラの一例といえよう。

以上のいずれも、台湾の風土や土地柄に即しつつ、便利で目新しく好感の持てるものを創出したものであり、ここにこそ、豊島が期待した台湾の将来図があるといえよう。

台湾独自のものを、との姿勢は、台湾の文学に対する豊島の助言にも見られる。台湾の文学者たちから、台湾文学には何が必要か、意見を求められた豊島は、

この少女（知本温泉で出会った少女―呉註）のイメージを、台湾に於ける文学者達、「台湾文学」や「文芸台湾」などに拠つて人々に、象徴として提出してみたい。文学の独立発展のために彼等は骨折つてゐる。ところで、台湾に於ける文学が、東京の主流に對立して何等かの独自性を獲得することを目指す場合、それは往々にしてエグゾチスムに陥るし、民衆の生活をいとおしんでレアリスムに徹しようとする場合、それは往々にして發展を阻害されるものに突き當る。

と指摘する。ただし、台湾で文化人の誰と交流したのかということについての言及は見られない。

ここで、昭和十七年における台湾文壇の状況をまとめておきたい。当時、理念において相對立する『文芸台湾』と『台湾文学』の両誌を中心に、東京の主流から自立し、台湾文学の独立的な發展を図る氣運

が高まっていた。全台湾の文芸家が集まる台湾文芸家協会の機関誌『文芸台湾』（昭和十五年一月創刊。隔月刊）が、昭和十六年に入つて協会から切り離され、西川満主宰の月刊同人誌に衣替えする。以後、台湾の異国情緒に耽溺するロマンチズム、という西川色が強まった『文芸台湾』への反発から、昭和十六年五月には張文環らによつて季刊誌『台湾文学』が創刊された。台中講演会の開催に奔走した人たち（楊達ら）がその同人であり、本島人の家庭問題や異民族間の摩擦の問題に注目し、リアリズムを重視した点が特徴である（中島利郎・河原功・下村作次郎編『日本統治期台湾文学文芸評論集 第四卷―一九四一年六月―一九四三年三月』平成十二年四月緑蔭書房）。

豊島が、「将来に對して多大な創意が要望される。文学についても然りである」、「知本のあの美しい少女のように、大地を蹴でしかとふまへながら、美しい顔容でつつ立つことが、文学では出来ないものであらうか。台湾笠に模様布をつけるといふ珍らしい装ひは、思想の飛躍と考へてよからう」と言うとき、少女の裸足の形象とは、『台湾文学』の創刊時の抱負、すなわち、「何処までも台湾といふ大地に足をしっかりと踏みしめて書くべきである」（黄得時「台湾文壇建設論」『台湾文学』第二号昭和十六年九月）を想起させよう。また、台湾笠に花模様の布というのは、台湾在来の土地事情をリアルに描いた上で、更に創意を加えることを意味するのではないだろうか。

文学に創意を求めるのは豊島だけの考えではなかった。「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」では、「二人は交々に、短い期間だつたし、余り台湾の雑誌を読んでゐないが……その中二三のものを見たが全般

的に「新しい感覚」に欠けてゐる（中略）今後の作品には「新しい感覚」を持つ様にすべきだと思ふ」と感想を述べている。ここでいう「新しい感覚」とは、「創意」に通じ合うものであらう。

最後に豊島は、現在の台湾文化には「熱情の不足が感ぜられてくる。大衆から盛り上つてくる熱情の謂だ。この熱情なくしては、台湾の性格を作り上げるのは恐らく困難だらう」と指摘する。これは、単に、前述の文化の貧弱さによる物足りなさに限らず、本島人の生活ぶりから窺われる感覚の鈍さ、怠慢なども与つていよう。

熱情を湧かせるべく、台湾が日本の南進基地であることと結びつけて豊島は次のようにいう。

台湾は、今や南方を向いてゐる。台北を本島の臍とすれば、基隆は足であり、高雄は手である（中略）この港は今や、広く大東亜海の四方へ開いてゐるものとなつてゐる。この実感から高雄港の熱情が湧いてくる。かゝる高雄港を手として持つ台湾に、大きな熱情の湧かない筈はない。大きな熱情が湧けば、文化台湾の性格もやがて創り出さるゝだらう。私はそのことを、台湾に在る内地人や本島人や高砂族の優秀な人々に期待したい。またこのことの助長こそ、台湾皇民奉公会の主目標の一つともなるべきものであらう。

日本の南進基地として、台湾在住の優秀な人材や台湾皇民奉公会への強い期待感が看取される。これによって台湾らしい文化が創出され

るだらう、との考えの背後には、前節でも触れた、台湾在来文化建設ブームが関わっているように思われる。こうした観点から、昭和十七年時点における台湾文化人の意見として、以下のものは注目される。

〈台湾芸術界への要望〉（『台湾芸術』第三卷第一号、昭和十七年一月）

（一）詩人・教員 国吉陽一

「今や台湾が南方の心臓となり、その地位が内地の人々にも重要視されて来た今日「台湾を知らずして南方を語るべからず」とまで謂はれている。我々は内地の人々に台湾の事情を知らせる為にはやはり郷土色の豊かな芸術が必要ぢやないかと思ふ。」

（二）奉公委員 張星建

「茲数年来、本島文芸家の活動は刮目に価する。本島固有文化の整理、そして南方基地として恥づかしくない独自の創作文化の建設」（以上、前掲『日本統治期台湾文学文芸評論集 第四卷——一九四一年六月——一九四三年三月』による）

これらの発言が、前の豊島の言葉と重なるものであることは明らかであらう。なお、前掲「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」でも豊島は、「台湾へ来て見ると小国民に対する文学雑誌がなく又その運動をしてゐる様な傾向も見受けられない。（中略）南進基地であり南方拠点である台湾には特殊事情があればこそ、小国民文学運動は一日も早く提唱すべきであり、その運動を開始すべきである」と発言していた。

このように、当時の台湾では、地方文化の振興をスローガンに、日本の南進基地としての台湾の文化を熱情を持って創出し、内地に発信

することが要請されていたのである。

昭和十二年に入ってから、新聞漢文欄の廃止^⑥をはじめ、緊迫になった日中関係で抑圧的な文化政策が始まっていた。地方文化の振興という要請により、台湾固有のものが初めて公に重要視され、総督府側からの規制もやや緩やかになったのである（『長谷川清伝』昭和四十七年一月長谷川清伝刊行会）。いわゆる台湾色の再発見の気運に乗り、台湾の文化人たちは郷土色の重視という大義名分を最大限まで利用し、在来の文芸活動の復興、ひいては台湾の独特な文芸の確立に励んでいた。例としては、豊島らが台中で行った講演会への参加も含め、楊逵が抑制的な文化政策期間の沈潜を経て文芸活動を再開したこと、あるいは、呂赫若が昭和十七年後半から台湾東宝で展開した国民劇活動などが挙げられる^⑦。

豊島は、台湾文化の未熟さ、後進性に気付きつつ、台湾の文化的な地位向上、台湾文化の振興に熱心な台湾文化人の姿を目の当たりにしたはずである。その上で、台湾文化に欠けている熱情をかき立てるためには、知識人たちから一般民衆に至るまで、こぞって在来文化を重視することが必要だと考えたのである。

四、豊島与志雄の台湾認識

ここでもう一度、豊島が捉えてきた台湾の姿を振り返ってみよう。日本人に馴染みのないパイヤから内地人にも知られていない台湾の地酒、更に本島人の上流階級すら関心を示さない食物市場の風情まで、

豊島は埋もれていた台湾の風土に光を当てることで、台湾の実体を内地の読者に紹介している。一方、台湾の文化については、その土地柄に即した郷土色を重視すべきだとしている。最後に、台湾独自の文化を育成するためには、台湾在住者と台湾皇民奉公会とが足並みを揃えて、日本の南進基地としての台湾の文化を創出しなければならない、とする。

こうした問題点に気付いたのは、豊島に限らず、浜本も同じであった。前掲の「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」に示されたように、浜本は台湾文芸における新しい感覚の欠如と、台湾文化の性格について発言していた。一方、窪川の「台湾の旅」には表面上そうした発言が見当たらないものの、台湾の風物に淋しさを感じたと述べる点には、台湾文化に対する何がしかの思いもあったと推測される。しかし、この二人には、豊島のように台湾の特殊性を見出した上で、今後の文化育成のあり方に焦点を絞って熱心に論じる姿勢は見られなかった。

ただし、豊島に欠けていた観点もあった。「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」では、記者が「今まで中央から来台した作家が東台湾方面まで足を運んだ事は余りなかった様だ、絶無に近いと言つてよからう」と、日本からの作家が東台湾まで足を踏み入れたのは今回が初めてだと述べている。作家たちがそうした東台湾に各々着眼した箇所から、一層豊島の観点の独特さを垣間見られる。「台湾の旅」では「バスはきれいな住宅街に初まる花蓮港の町へ入った（中略）次の日、この地の開拓村吉野村を訪ねて、村長さんの話を聞いた。血を流すほどの同胞の辛苦がこゝで続けられたのだと聞くと今まで台湾といふところ

に、たゞ異国的な興味をだけ持つてゐたことがすまなく思はれてくる。」と、移民の苦勞に思いをはせ、さらに娘たちの結婚難を嘆いている。ここには、植民地の移民政策の問題点を浮き彫りにし、移民達に寄せる温かな視線があり、同じく花蓮港近辺を取り上げても、単に、未知に等しい東台湾を注目させようとする豊島とは相違している。もちろん、能智修弥と『遙かなる祖国へ——中共残留者の手紙と手記』（昭和二十七年三月東和社）を共編した豊島が、日本人の移民問題に無関心だったとは言いいまい。しかし、「台湾の姿態」での豊島は、台湾在来の物事に焦点を絞るために、あえて移民問題を取り上げなかったのかもしれない。

豊島に欠けている視点の第二は、純粹な日本の事物への言及である。「台湾の旅」では、台湾唯一の官幣大社である台湾神社にかなりの紙幅を割いている。主人公の郷愁を慰めるべく、日本の面影や日本風の物事を登場させるシーンも少なくない。これとは対照的に、「台湾の姿態」で言及される日本の事物はわずかであり、台湾の風土の中で違和感を示す神社と厨子を取り上げるだけである。

以上から、「台湾の姿態」において豊島は、極力日本的な事物を排除し、台湾のありのままの姿、また、あるべき姿を記したと推定されるのである。

中村哲「昨今の台湾文学について」（『台湾文学』第二卷第一号昭和十七年二月）は、旅行者の冷淡さについて次のように述べる。

多くの旅行者はその土地の作家の心情を刺戟してまでも作品の批評をなし、その土地の文化を育成させようとする積極的な厚意を持ち合はせてはいないものである。通りすがりの土地の作家に批評を加へることは自己の便宜から避けるのみならず、その土地を離れて後、その土地の文学を批評するといふ熱意を持つものは少ないのである。中央に帰つて、辛辣な台湾の批評をしたといふ、この土地で最も評判の悪い杉山平助氏の態度にも、私はかへつてこの土地の厚意を感じるのである。およそ旅行者は台湾の文化育成について如何なる忠言をなしたであらうか。このことについては文芸銃後講演会の人々もその例に洩れるものではなかつた。

前掲の速河榎夫「文化時評 作家の来台」からも窺えるように、昭和十七年時点の台湾文化人の要望は、旅行者の目を通して、台湾の文化的地位向上、文化的な台湾統治の参考となるべき意見を提供して貰うことであつた。更に、旅行者が内地に帰つても台湾を論じ続けることで、内地での注目度を高めてほしい、との期待もあつたのである。この点、先ほど述べたように、内地の人々に台湾の文物を知らせ、見逃されがちな大衆文化を紹介し、さらに、日本の南進基地である台湾が特色ある文化を創出する必要性を説いた豊島の文章は、中村の要望を満たすものであり、台湾の文芸エリートの考え方とも重なっていた。「台湾の姿態」を掲載した『文芸』編集後記に、「風物に恵まれた台湾を約一ヶ月間旅行された豊島与志雄氏の「台湾の姿態」は、豊かな叙事詩ともいふべく、南への足場としての台湾を再認識する上にも格好

の読物である」とあるように、本作は、まさしく台湾文芸界待望の在来文化論だったのである。あるいは、大政翼賛会文化部で相談役を務めていた豊島が、政策協力の意味合いから台湾文芸界の期待に応え、その熱意を踏まえて、台湾の姿を内地へ届けたものだったのかもしれない。

この「台湾の姿態」のほか、豊島はほぼ同時期の昭和十七年五月二十六日「東京朝日新聞」に、「貴重な人的資材 高砂族の将来性について」を寄稿した。高砂族が昭和十六年に高砂義勇隊としてバタン半島攻略戦で立てた功績を讃えるものであり、教化を受けた高砂族の活躍よりは内地人にも遜色がないと高く評価した上で、今後、文化向上のために教化に力をそそぐべきだと提案している。さらに、「台湾の姿態」発表と同じ昭和十七年六月、少年文学「光を育てる人々」（昭和十七年六月〜十二月『少国民文化』）の連載を開始する。いずれも、今回の台湾訪問時の見聞に基づいたものであり、台湾の現実を直ちに内地に知らせたものであった。

「台湾の姿態」を中心とした上記関係作品からは、「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」を通しての熱弁も含め、国策協力という限界を抱えつつも、台湾に寄せる豊島の誠実な厚意を見て取ることが出来る。前掲の関口安義氏は、「台湾の姿態」に、台湾の風物・文化を適確に捉えた観察眼と現地人に寄せる暖かな眼を読み取っているが、それだけではなく、現地の文化人の意向を叶えるべく、台湾の進むべき道を示し、また、ありのままの姿を内地に紹介しようとする意図があったと考えられるのである。

「台湾の姿態」がほかの中国旅行記とともに単行本の『文学母胎』（昭和十七年十二月河出書房）に収録された際、豊島はその後記で一連の旅行記についてこう綴っている。

これらの土地の事情は刻々に変化しつつあるので、文章のそれぞれに日付をつけておいたし、その日付を考慮を入れて読んで貰いたいのだが、然し、急激な歴史の進展の底の変わらぬものを、多少は捉へて^{ママ}るつもりである。

昭和十七年四月から十二月までの間に台湾文芸界で起こった大事とえば、台湾皇民奉公会が南進政策の協力として、地方文化の発展を促進すべく、同年の八月にその傘下に文化部を設けたことが挙げられる（山口守編・藤井省三「ほか」著『講座台湾文学』平成十五年三月国書刊行会）。それによって、台湾の文芸界は昭和十八年までに、ローカルカラーのブームを一つのピークに至らせたのである。すなわち、豊島らが台湾を離れたあと、台湾文化人が抱えた台湾文化の向上という願望が徐々にものになっていったのである。豊島が時を経てまな「台湾の姿態」の末尾に四月という自分の目でその様子を確かめた主な時間帯を付けつつ、台湾の変わらぬ姿を捉えたと確認できたのは、それこそこの紀行文が台湾文化の動向に与って成り立ったことを示唆しているといえよう。

注

- (1) 『台湾芸術』同号に収録された「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」（詳しくは(2)を参照）と同様、この記事も四月の時点で書かれたものと考えられる。従って、ここでの「去月」とは三月を指すことになる。「或日記者は全島の講演を終へて台北鉄道ホテルに暫く休息してゐる四氏を訪ねたが、生憎く村松、窪川両氏不在だったので豊島、浜本両氏に面談した」とあるように、このインタビューは一行が全島の講演旅行を終えたころ、すなわち四月十七日以後に行われたと推測される。なお、ここでは、「南進基地」と称された台湾ではあるが、文化部門に於いては中央より遠ざかつてゐる関係か、確かに中央に比してより遅れて居り、それに無刺戟な為か常に遅れた文化を甘受しゐるやうな現状である。其処へ中央の作家が態々文芸報国の一念で波路を遠しとせずして来台し、新しいエネルギーを台湾に植付けたので台湾に見れば大収穫と言はねばならぬ」とあるように、文芸講演によって新たなエネルギーが付与された、との認識が語られている。
- (2) 永楽市場がある永楽町の近辺に当たる。『台湾鉄道旅行案内』（前掲）には、「大稻埕市場（永楽町）異色ある大市場で、魚鳥獣蔬菜類は云ふに及ばず、諸雜貨店亦美味珍肴の香を放散させて食欲をそゝり立て、ゐる」（六十八頁）とある。
- (3) 昭和十七年四月に設立された、皇民奉公会傘下の「台湾演劇協会」の文芸部長、松居桃楼を指すか（中島利郎『日本統治期台湾文学小事典』平成十七年六月緑蔭書房）。豊島は「前掲の『台湾芸術』のインタビューで、「演劇の一元制統制機関を造り演劇指導について内地より松井桃郎氏を招聘して来て指導に当たらせると云ふ事を内地を出発する前に新聞で見た」（「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」と、松井氏の来台を知っていた。
- (4) 河原功『翻弄された台湾文学―検閲と抵抗の系譜』（平成二十一年六

月研文出版）、垂水千恵「日本時代の台湾文壇と大政翼賛運動に関する一考察」（「横浜国立大学留学生センター紀要」第二号平成七年三月）、垂水千恵「李香蘭を見返す視線―ある台湾人作家の見たもの」（四方田犬彦編『李香蘭と東アジア』平成十三年十二月東京大学出版会）等を参照。

- (6) 「国民精神涵養」の障害、支那人心理を喚起することを免れるべく、昭和十二年四月一日付「台湾日日新報」掲載の「けふ漢文欄廃止」により、「台湾日日新報」、「台湾新聞」、「台南新報」という三紙をはじめ、新聞の漢文欄が次々と廃止されることになった。日本語の識字率が三十七・八六%であった当時、それは本島人にとって創作発表の主な場を奪われたほどに等しく、彼らの文芸活動に大に響いたのである。（注5）のほか、許從嘉「国語としての日本語から言語としての日本語へ―戦前から戦後に至までの台湾人の日本語観に関する一考察―」（一九五五年）一九四六年」（『言葉と文化』第九号・平成二十年三月）も参照。
- (7) 注（5）参照。

付記

- 一、テキストについて、「台湾の姿態」は『文芸』（昭和十七年六月一日改造社）、「台湾の旅」は『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』（河原功「ほか」編平成十年七月緑蔭書房）にそれぞれよった。テキストと引用文は適宜通行の字体に改めた。
- 二、「台湾の姿態」のテキストに関して、『文芸』（昭和十七年六月改造社）に掲載されたものが単行本『文学母胎』（昭和十七年十二月河出書房）に収録された際、本文の末尾には「所謂台湾ボケなども克服されるだろう」という一行の加筆が見られる。『豊島与志雄著作集』第六卷（昭和四十二年十一月十日未来社）に収録されたテキストにはそれと一致した文句があるため、単行本に準じたものとみてよからう。



図1 台中市街略図。鉄道部編『台湾鉄道旅行案内』（昭和十五年二月東亜旅行社）

台湾視察案内図

凡例	
	局 鉄
	社 鉄
	自動車
	台 車
	徒 歩
	汽車+併行スル自動車線省略

図2 行脚図・「台湾視察案内図」(鉄道部編『台湾鉄道旅行案内』昭和十七年二月東亜旅行社。図3も同じ)

日 4 第	日 3 第	日 2 第	日 1 第	出 發	到 著	乗 物	記 事	宿 泊 地
士 草北 山溫泉 林泉	北 淡 臺 投 水 北	板 臺 橋 北	基 隆	地名	地名			
ゴ ゴ ゼ ニ一九 美一〇〇 盛士草 北山林	ゴ ゴ ゼ 一〇四 三北淡 (新北北 北投溫泉) 投 投 水	ゴ ゴ 六二四 二臺板 北橋	ゴ ニ 二五 臺基 北隆	時間	時間			
ゴ ゴ ゼ ニ一八 五士草 北山林	ゴ ゴ ゼ 一〇一 三北淡 北投水	ゴ ゴ 六二五 二臺板 北橋	ゴ 正 三午 五毛					
バス 三三レ	バス 三三レ	バス 三三レ	定期船 毛レ					
士林一五三頁參照 芝山農社參詣	草山溫泉一五五頁參照 士林一五三頁參照 臺北淡水間汽車 三等十八錢、約三十分 淡水新北投間 三等十五錢、約三十分 大砲岩 善光寺 不動尊 臺北公園 北投神社 大師岩 湯瀨 地藏谷 硫黃谷 淡水平一五八頁參照 北投溫泉一五六頁參照	臺北板橋間汽車二等二十七錢、三等十二錢、十五分 林本源庭園 驛から徒歩約十五分 板橋七二頁參照 市營バス十錢、ハイヤーで約三時間 新公園 博物館 商品陳列館 永樂町市場 龍山寺 植物園 建功神社 總督府 臺灣神社 動物園 陸軍墓地 孔子廟 臺北橋 大稻埕 臺北六十一頁參照	基隆五六頁參照 基隆港 基隆神社 獅土館 市營バス十錢 ハイヤーで約一時間 基隆臺北間汽車二等八十五錢、三等四十五錢、五十分					
臺 北	北 投 温 泉	臺 北	臺 北					

図3 台湾一周のモデルコース。